

報告

新型コロナウイルスと留学生のホームステイ (コロナ期の草の根国際交流)

近藤 佐知彦^A

Pandemic and Homestay for International Students (Grassroots International Exchange in the COVID-19 Period)

Sachihiko KONDO^A

Keywords: COVID-19, survey, inbound students, homestay, host family

キーワード：新型コロナウイルス感染症、アンケート調査、受入留学生、ホームステイ、ホストファミリー

1 はじめに

1.1 調査の背景

新型コロナウイルスが猛威を振るうなか、世界各国では海外渡航を含む教育プログラムが全面的な中止もしくは延期に追い込まれ、国境を越えた留学生の交流についてはほぼストップさせられるに至っている (IIE 2020, EAIE 2020) ¹⁾。日本でも深刻な影響が出始めており、現在の留学交流の実態に関して、微力ながら筆者らも調査に取り組んできた (中野ほか 2020, Ishikura et al. 2020) ²⁾。オープンな国境管理を前提として、地域国際化と軌を一にして取り組んできた留学生教育・国際教育はどう変化しようとしているのか。

筆者はかつてホームステイについての研究に取り組んだ経験があり (近藤 2017) ^{3) 4)}、往事に構築したネットワークなどを利用し、外国人留学生のホームステイについてのアンケート調査も試みた。その結果、多くのファミリーが今後とも外国人学生のリアルな受入を期待していることが判ってきた。つまり大学をとりまくコミュニティの一部には、越境を伴う留学が戻ってくることを熱望する空気がある。

なお今回の調査そのものを論ずる前に、先行研究の検討を通じて、留学交流事業の中でホームステイが占める位置やその教育的機能について検討をおこない、

大学等の国際教育再活性化にも通じるホームステイ事業の特色を明らかにしていく。

1.2 先行研究概観

山口 (2008) によれば、ホームステイとは比較的最近になって認知された語彙で、日本では 1998 年刊行の広辞苑第五版で「留学生として訪れた学生が、一般家庭に寄留し、その国の習慣や言葉を学び、生活すること」と定義されたのが最初であるという。オックスフォード英語辞典に新出単語として収録されたのも 2004 年らしい。青少年を現地家庭で受け入れる現在のホームステイ様態は、1933 年に米国人ドナルドワットが始めた EIL (The Experiment in International Living)、すなわち外国人の若者同士が国境を越えて相互の家庭を訪問する社会運動に起源を発している ⁵⁾。そういった来歴を考えれば、ホームステイが留学生受入と結び付けて論じてこられたのも当然であろう。

ホームステイ研究の一つの観点は、ステイする学生の第二言語習得の側面である。鹿浦 (2008) がホームステイをしている外国人学生は日本語の成績にアドバンテージがあったとする一方 ⁶⁾、大規模データを使い、今なお世界で参照されている Rivers (1998) による古典的研究では、ホームステイをした米国人学生はロシア語の Speaking や Listening の能力が劣っていたと

A: 大阪大学国際教育交流センター

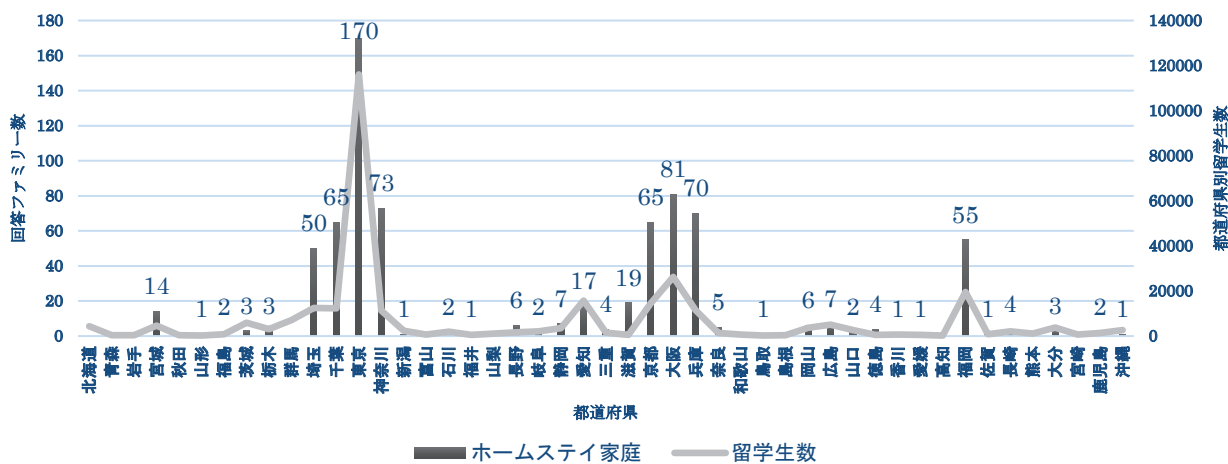


図1 回答家庭分布（棒グラフ）・地区別留学生分布（折線グラフ）

され、その結果は関係者に驚きを持って迎えられた⁶⁾。佐藤（2008）によれば、旧ソ連邦では西側の外交官にロシア語習得をさせないようホストファミリーに手を回していた、というよう事情もあったというが⁷⁾、ホームステイさえすれば第二言語の成績が上がる、というほど単純なものではなさそうだ。

ホームステイ研究のもう一つの潮流は受け入れた学生とファミリーの側の相互的なアクションに注目するアプローチである。原田（2013）は社会的支援の立場から学生にとってのファミリーステイの利点を論じているが⁸⁾、Iino（2006）は、異文化理解や自国文化理解、そして外国語学習などの様々な局面について、単にステイしている学生だけではなく、ホストファミリーにも利益があるという一挙両得性（two-way enrichment）がホームステイという宿舎形態を特色づけているとした⁹⁾。本報告では、この「一挙両得性」について念頭に置きつつ論を進めたい。

1.3 調査概要

調査は旧メディア教育開発センター（2009年廃止後、業務は放送大学学園に移管）が研究者を対象に無料で公開してきたREAS（リアルタイム評価支援システム）を利用してオンライン形式で実施した。

同居する家族構成などを同定する質問をおこなった上で、「貸し出し可能部屋数」「朝食・夕食を家族と摂るか」「留学生受け入れが再開した場合、積極的に受け入れたいか」「その理由」などについて、選択式・自由記述式を取り混ぜて質問票を作成している¹⁰⁾。

そして、前回の研究時にお世話になったネットワー

ク・メーリングリストを通じ、2020年7月1日から7月15日にかけて、ホストファミリーとして登録をしている家庭を対象に回答を募ったところ、全国から750件のレスポンスを得ている（1名はデータ欠損）。

上の図1は749人の回答者が所在する都道府県を棒グラフ（左軸が単位）で表したものである。回答件数は数字としても図1内に付記している。参考までに日本学生支援機構がまとめた各都道府県における留学生受入数を線グラフの高さで表した（右軸が単位）。

答えて頂いたファミリー数としては、東京が最も多く、大阪、神奈川、兵庫がそれに次ぐ。回答数0や1の地域もいくつかあるが、これらも地域の留学生数と回答ファミリー分布がおおむねパラレルになっている様に読み取れる。

2 回答ファミリー像

2.1 家族構成

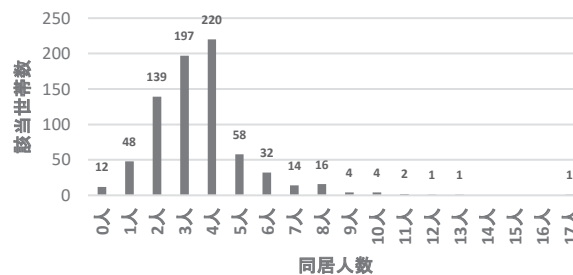


図2 ホストファミリーの同居人数

質問票では、各ファミリーの成人男性・女性、未成年の男女別、高等学校以下の男女別、中学以下の男女別、小学生以下の男女別、学齢前で3歳以上の男女別、3歳以下の男女別など、個別カテゴリーの人数記入を

求め、それを合計して「同居家族数」として、図2にあらわした。「同居家族ゼロ」とする回答が12件ほどあり、これをどのように解釈するべきか迷ったが、ゼロと回答したケースも含めての平均を出すと、同居家族サイズは平均3.53人であった。

家族構成については、子供が小・中学生、高校生といった「学校に通っている児童・生徒」か、それ以前の乳幼児であるか、または成人のみの家庭か、について分類をこころみた。ただし複数の子供が同居する場合、最年長の子供が学齢に達しており、その下の子供が未就学である場合などにダブルカウントが生じているため、合計数は750を超過してしまった。

様々なパターンが考えられるため、図3では合計数が750を上回っているものの、ホストファミリーをつとめる家庭の傾向が明らかになるデータとして示している。また、図4ではそれぞれのファミリーが同時に貸し出すことの出来る部屋数を示した。ファミリー登録はしているものの、様々な家庭の事情で「現在はゼロ」とした回答もあった。

想像力を働かせながら、になるが、今回レスポンスをしていただいたファミリーの典型像は「東京もしくはその近郊、あるいは東京圏以外の留学生数が多い地域に住む」「学齢期を筆頭に複数の子供が居て」「同居家族は3-4人」といったところであろうか。

もちろん親とともに学齢期前の小児だけがいる家庭



図3 子供について



図4 同時貸し出し可能な部屋数

や、成人が一人しか居ない家庭、成人のみで構成された家庭もホストファミリーとして活動されていることは言うまでもない。多くの成人が同居し、加えて幼い子供が居ると申告したファミリーでは、孫世代まで含めた3世代以上が一緒に暮らしている可能性もある。また「同居者ゼロ」と回答した家庭では、自宅の「離れ」などファミリーと物理的に別れて学生をステイさせているのかもしれない。

自宅の規模としては一室もしくは二室が予備室となっており、その部屋を学生に貸し出す、という運営形態がホストファミリーのマジョリティであるらしいことは看取できた。

こういった家庭モデルにとって、ホームステイ事業がどのような「一挙両得性」をもたらすのかについて考慮しつつ、ホストファミリーがコロナ期、コロナ後の留学生の家庭への受入に向け示す態度について検討していきたい。

3 留学交流が再開したら…?

3.1 積極性のグラデーション

本アンケート回答者はホストファミリー登録家族であり、留学生が日本に入国できるようになった際、積極的に受け入れようとするのだろうか。それとも何らかの条件付きで受け入れるのだろうか。あるいは留学生受入は「ポストコロナ期」にはなり立たないスタイルの宿舎なのだろうか。図5は「数年のうちに留学生受け入れが再開した場合、留学生を積極的に受け入れたいですか。もっともよくあてはまる気持ちを教えてください」との設問に対する回答である。



図5 留学生受入への積極性

すぐにも受け入れたい、と無条件に留学生受入を待ち望むファミリーがおおむね四分の一を占め(図5)、留学交流が再開しても「もう留学生は受け入れたくない」と答えた家族は13家族に留まった。なぜ受入を

止めるのか「留学交流が再開しても留学生を受け入れたくない理由をお聞かせください」という自由記述の設問を設けたところ、以下の様な記述を得ている。

「ご近所の目があるので 世界的に落ち着かないと無理かな。万が一の事が起こってもいけないし」「コロナ感染症が怖いから、潜伏期間もあり、感染してない確証が持てない。また、日本滞在中に、観光する為、感染リスクが高い」そのほかにも、老齢の家族を心配する声などがあつた。

その一方で、かなりの家族が「前回受け入れたアメリカ人がわがままで疲れたから」「昨今の流れを受けて、住んでいるマンションでホームステイの受け入れ、民泊などが全面的に禁止されたため」「11年間、200人ほど受け入れをしてきて、もう疲れ卒業です」といった感染症には関係のない理由をあげており、「受け入れたくない」原因は必ずしもコロナウィルス一辺倒ではない事がうかがわれた。

それでは逆に積極的に受け入れたい理由は何だろう。

図6は留学交流が再開したらすぐにも受け入れたいという、いわば「留学生受入に前のめり」な180家族あまりに対し「留学生を受け入れたい理由をお聞かせください」という質問を付し、いくつかの選択肢から三つまで選択を求めた結果である。

一番の理由は「子ども」であり、子どもの国際性涵

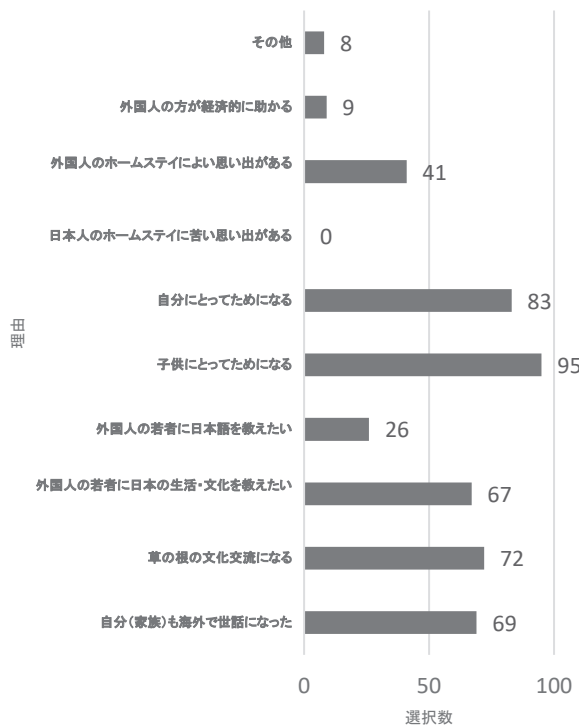


図6 留学生受入に積極的な理由

養など教育上の目的が、留学交流さえ始まってしまえば、多少のことを気にせず外国人をステイさせたい、という積極性の裏にあるようだ。

自分にとってもためになる、草の根の文化交流、といった理由のほかに「自分(家族)も世話になった」といった記述が大きな比重を占めているのを知ると、ワットのEIL運動に端を発する現在のホームステイ事業の本質が垣間見えていとも考えられる。ある種の社会運動であるならば、多少の困難を乗り越えてもやり抜きたい、は強いモチベーションとなる。

3.2 外国人受入の条件

さて先の図5で留学交流再開後の外国人のホームステイ受入についてどう考えるかを問うたとき、「すぐにも受け入れたい」家族のほかに、「受け入れてもいい」「場合によっては受け入れてもいい」「受け入れないでもない」と、いわば何らかの条件付きなら受入可とした家族がおおむね四分の三を占めていた。

これらの家族に対し、同様に彼らが受入を決断するとしたら何について気にするのか、そのための主要な条件・要因について三つまであげて貰ったのが図7となる。

感染の激しい国からは歓迎できない。

日本が物珍しくて、渡日中は何かと出歩くことの多

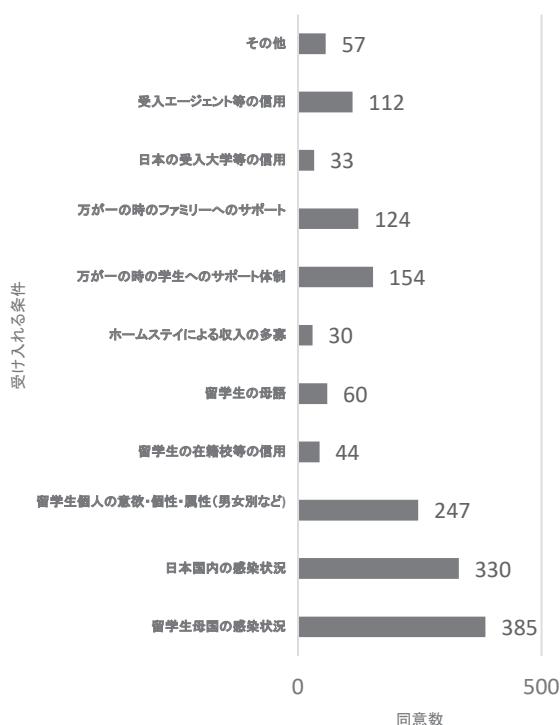


図7 留学生受入を決断する要因

い若者であろうからこそ、国内の感染状況も気になる。そのあたりのことについては予想がついた。

それに続く要因としては学生個人の意欲、個性、属性、というところがあげられたのが、宿泊者を家族の一員として迎え入れるホームステイという形態の特色的なところかもしれない。ちなみにホストファミリーのなかには、同居をする家族構成などから、女子学生限定といった属性制限を設けているケースもあり、とにかく条件さえええればドシドシ受け入れても良い、という積極性の表れとも解釈できる。

3.3 筆者のバイアスと実際

その一方、本調査票をつくるにあたって「外国人受入に際して英語学習を期待するファミリーが多いだろう」といった思い込みから「学生の母語」といった選択肢を設けてみたが、そういった条件を挙げるファミリーは図7にもあらわれているように多数を形成するに至らず、筆者の予想よりも大幅に少なかった。

それとともに今さらながら反省したのが、調査票をつくっている時点の筆者の思い込みである。感染症の終息もしくは制御が完全に出来るより前に留学交流が再開され、ある種の制限の下で外国人学生達は日本の宿舎探しをするであろう、という前提である。質問文内に明記していないが、質問自体がいわば「ウィズコロナ」時代に留学生を受け入れるかどうかを問うことを想定したものであった。

一方回答者家族も、感染症の終息もしくは制御が可能になる前に留学交流が再開されることを想定しつつ、ある程度のリスクをとってもホームステイする学生との交流を優先するか否か、といった視点で答えており、図7で選択されたホストファミリーの前向きな姿勢は、感染症の完全防御が出来なくとも、ある一定の条件を備えた外国人であり、また国内でも一定の条件を整えば、彼らを家族の一員として迎えることに吝かではない、という「草の根交流への熱望」がホストファミリーの間にみなぎっている事を示していた。

3.4 さらなる分析の可能性

本アンケートについては750という相当数のデータが集まったにもかかわらず、筆者の非才非力のためにごく表層的な分析をただけでみなさまに報告をする状況であることを、まずお詫びしたい。

それぞれの回答者の家族構成をはじめとして、ホストファミリーと学生とが一緒に食事を摂っているか、といった日常生活に及ぶところ、そしてホストファミリー自体が今後ホームステイ事業が盛んになるためにはどのような事を考えているのか、といった自由記述まで多くのデータが短期間に集まっている。

データ分析などについては、必ずしも専門家ではない筆者としては、外国人との寝食を共にするまでの交流を実施してきた（もしくはそれを望んで登録している）方々が、7月上旬の時点で、感染症とともに生きる、もしくは感染症終息後のニューノーマルな社会の仕組み、世界と自分たちの生活見通し、また外国人との関わりをどのように予期し覚悟しているのかをうかがわせるデータになりうると感じている。

例えば食事を共に摂る家庭と別々の家庭、自分や家族が世話になったからその「お返し」でホームステイに目覚めたのかどうか、子どもの年齢などそれぞれの因子と態度との相関をあきらかにするなど、もう少し緻密な分析が出来る余地がありそうだ。

今後分析等についてアドバイスやお手伝いいただける方がいらっしゃれば、是非とも協働させていただきたい。もちろん更なる調査実施に向けてアイデアを頂ける方も大歓迎である。

4 むすび

時間的制約と筆者の力不足から、十分に分析が行き届いたとは言い難いレポートであるが、ここで一つだけ強調をしたいことがある。

今回のアンケートで明らかに出来たことの一つは、日本のホストファミリーが留学生等に宿舎を提供する動機についてである。Iino (2006) が指摘するところの一挙両得性が大きく与っており、ファミリーにとってのメリットは、例えば小さな子どもがいる家庭では、「子どもにとってためになる」というところに大きな比重がかかっていた。

従って、ホストファミリー活動は；

- ① 子どもの成長のための機会創出
- ② 草の根の交流活動を通して自身の成長機会
- ③ 自分・親族が海外で得た経験を還元

といった、自分や家族を成長させる機会を求めたり、「恩返しをしたい」といった動機で遂行されており、経済的なメリットは後景に追いやられている。単なる貸

間業ではない、という強い自覚がある。

きちんとデータをとっていないためにやや情緒的な憶測になるが、すべてのファミリーの自由記述回答欄などから、外国人への宿舍提供はボランティアもしくは「道楽」であり、収益を目的としていない、という印象を受けた。多分、であるが、世帯収入等も、それなりにゆとりのある家庭がホストファミリーとなっているように思われる。

図6や図7にあらわれていたように、一旦留学が再開されたならば、感染症等のリスクについては低く見積もりつつ「できるだけ早く学生を受け入れたい」というホストファミリーが多い。これもやや乱暴に解釈すると、学生を自宅に受け入れるという活動自体が、経済性や安全性を第一に考えたものではなく、趣味性の高い活動であることを示している。趣味であるならば、要するにその活動に加わることに喜びを見出し、感染症の発症危険度などについて、無闇に高いリスク評価をしないであろう、という想定も出来る。

その一方、一挙両特性という観点からは、ステイする学生にとっては家庭的な環境で、よりきめ細かい健康管理や予防衛生的な処置が期待できる、といったメリットが享受できるかもしれない。

2020年度上半期にはそれぞれの国が鎖国もしくは準鎖国のような状況となり、留学交流は壊滅的な打撃を受けた。現時点では、国境を越える学生の移動がどのような回復を遂げるのか、もしくはこれを機に大学の学び自体が仮想的な方向に変質し、今後リアルな交流は衰えていくのか、見当もつかない。

筆者としては後者の未来図は描きたくない。その意味でも、外国の若者と生活を共にし、一緒に食卓を囲むような「密な関係構築」に熱い思いをもった市民であるホストファミリーの存在は心強い。地域コミュニティの一角を形成する学校等にとっても、こういった「草の根の交流復活を望む市民」の留学交流再開への熱い思いは留学交流再活性化への応援となる。引き続いてフォローアップをおこなっていききたい。

最後になるが、本アンケートに答えていただいたホストファミリーのみなさん、そしてアンケート実施に多大な協力をいただいたネクステージ社・ホームステイインジャパンの熊谷圭司氏、甲南学園サービス高島由夏氏には心よりお礼を申し上げたい。

注

- [1] 科学研究費挑戦的萌芽研究「教育機関・プログラムと連携した地域家庭への留学生受入れ；ホームステイの研究」（課題番号 16K13547; 2016-18）研究代表者 近藤佐知彦
- [2] 参考として「留学生ホームステイ受入に関する緊急調査」の質問項目を次に挙げる。
 1. お名前・連絡先は教えていただけますか
 2. お名前
 3. 連絡先（メールアドレス）をご記入ください
 4. お住まいの都道府県を教えてください
 5. 同居する家族に成人女性が何人居られますか（回答者ご自身を含みます）
 6. 同居する家族に成人男性が何人居られますか（回答者ご自身を含みます）
 7. 同居する家族に高校生以上の未成年女性が何人居られますか（回答者ご自身を含みます）
 8. 同居する家族に高校生以上の未成年男性が何人居られますか（回答者ご自身を含みます）
 9. 同居する家族に中学生の女子が何人居られますか
 10. 同居する家族に中学生の男子が何人居られますか
 11. 同居する家族に小学生の女子児童が何人居られますか
 12. 同居する家族に小学生の男子児童が何人居られますか
 13. 同居する家族に学齡前（三歳以上）の女児が何人居られますか
 14. 同居する家族に学齡前（三歳以上）の男児が何人居られますか
 15. 同居する家族に三歳までの女児が何人居られますか
 16. 同居する家族に三歳までの男児が何人居られますか
 17. お宅ではペットを飼っておられますか
 18. お宅のペットについて教えてください
 19. あなたのホームステイの運営経験年数について教えてください
 20. 同時貸出が可能な部屋数について教えてください
 21. ご提供頂けるサービスについて教えてください（複数回答可）
 22. 朝食については；
 23. 夕食については；
 24. 年間の受入れ人数（平均人数）を教えてください
*受入れ可能数ではなく、これまで受入れを経験された人数でお答えください
 25. 受入れ一人あたり、平均的な受入れ期間を教えてください
 26. 今後、より長期の受入れを行う意欲はありますか
 27. ホームステイで受入れされた学生のうち、留学生の割合を教えてください。大雑把で結構です
 28. これまでの受入れで、留学生が多かった理由をお聞かせください
 29. 数年のうちに留学生受け入れが再開した場合、留学生を積極的に受け入れたいですか。もっともよくあてはまる気持ちを教えてください
 30. 留学生を受け入れたい理由をお聞かせください

31. 仮に受け入れを決断する場合の要因をお聞かせください
32. 留学交流が再開しても留学生を受け入れたくない理由をお聞かせください
33. 今後、留学生のホームステイを増やしていくためにはどのような方策が必要だと思われますか。ご意見があればご記入ください(なければ空白で結構です)

引用・参考文献

- 1) IIE (2020). COVID-19 Snapshot Survey Series.
EAIE. (2020). Coping with COVID-19: International higher education in Europe EAIE.
- 2) 中野遼子、石倉佑季子、近藤佐知彦 (2020) 「COVID-19 による日本人学生の派遣留学への影響；日本人学生の声を中心に」ウェブマガジン『留学交流』Vol 112. pp. 44 - 57
Yukiko Ishikura, Ryoko Nakano, Sachihiko Kondo (2020). 'COVID-19 and its impact on study abroad in Japan.' JAISE Rapid Report
<https://jaise.org/archives/670> (閲覧9月1日)
- 3) 近藤佐知彦 (2017) 「現代のホームステイのあり方に関する一考察：宿舎は留学生の学習異文化理解を担えるか」ウェブマガジン『留学交流』Vol 78. pp. 12-32.
- 4) 山口隆子 (2008) 「ホームステイ誕生の背景と求められた異文化理解：世界で最初のホームステイ組織・EIL を事例に」神戸文化人類学研究第2号 pp. 30-69.
- 5) 鹿浦佳子 (2008) 「ホームステイする学生は成績がいい！ホームステイをすると成績が上がる？」関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集 第18号 pp. 99-134.
- 6) Rivers, W. I. (1998) 'Is being there enough? The effects of homestay placements on language gain during study abroad.' *Foreign Language Annals*. 31(4): pp. 492-500.
- 7) 佐藤優 (2008) 「自壊する帝国」新潮文庫
- 8) 原田登美 (2013) 「留学生の動機とホームステイ：ソーシャル・サポートによる異文化適応へのプロセス」ふくろう出版
- 9) Iino, M. (2006) 'Norms of Interaction in a Japanese Homestay Setting: Towards a Two-Way Flow of Linguistic and Cultural Resources' in M. A. Dufton and E. Churchill (eds.) *Language Learners in Study Abroad Contexts*. pp. 151-174. *Multilingual Matters*: Toronto.

受付日 2020年8月2日、受理日 2020年9月12日